

学生海外調査研究	
15世紀イングランド北部地域経済に関する資料調査	
加藤 はるか	比較社会文化学専攻
期間	2008年9月12日～9月23日
場所	イギリス ロンドン、湖水地方
施設	イギリス国立公文書館、大英図書館、カンブリア州立公文書館(カーライル本部、ケンダル支部)、アーミット図書館

1. 海外調査研究の必要性・目的

15世紀半ば日本においては応仁の乱という内乱が発生したが、同じ頃イングランドにおいても王位をめぐるばら戦争という内乱が生じた。しかしその後日本は更なる混乱の戦国時代へと突入するが、イングランドでは15世紀後半から中央集権化的動きが出現したと捉えられており¹、内乱の後の歩みは大きく異なる。そこで15世紀イングランドについて検討することは同時代に内乱を経験しながらその後の展開が大きく異なる応仁の乱の検討にも新たな視点を投げかけるとともに、両者を比較の視点をもちつつ考察することで、それぞれの社会の独自性を明らかにすることも可能であり、日本文化の研究にも寄与することになるのではないだろうか。

15世紀イングランドについては金銭を媒介とする封建制とは別の主従関係、「バスタード・フェューダリズム」概念の提示以降、社会的紐帯やパトロネージをキーワードに研究が行われてきた。特に1970年代以降は「ジェントリ²と地域社会」をテーマにさまざまな地域について研究がなされてきたが、それらは地域政治社会の状況、大土地保有者、地域での大貴族のアフィニティ関係についてなどが中心で、イングランドという枠組みの中にある地域社会として、幅広く総合的に地域社会とそれを取り巻く外部との関係を捉えているとは言いがたい。

そうした中で私の主たる関心は政治的枠組みが変化していく15世紀の中で、それまで王権と緩やかな結びつきしか持たなかったような地域と王権や他の地域との関係、イングランド全体の中でのその地域の位置づけがどのように変わっていったのかということにあ

る。

修士論文においてはケンダル諸侯領（Barony of Kendal）という地域を対象に主に王権とのかかわりを考察した。ロンドンから遠く離れたイングランド北部は大貴族の影響力が強いといわれ、王権との結びつきは緩やかなものであったが、その中でもスコットランドとの国境に近い北西辺境域の、ウェストモアランド州ケンダル諸侯領は在地大貴族もおらず、地域政治社会を統べるのに十分な所領を保持し、また同時に十分な数のジェントリをアフィニティに抱える高位の人物がいない地域であった。

諸侯領の4分の1は14世紀末から隣接するランカシャーの小規模ジェントリであったパー家の、2分の1は15世紀前半から主として王族のものとなり、残りの4分の1はさらに分割して保有されていた。ケンダルの有力ジェントリは国王、近隣の大貴族クリフォード家（同じウェストモアランド州の北半分の地域の最大領主、州シェリフを独占）、ネヴィル家らをロードとしていたが、ジェントリは貴族や国王と複数の関係を築いており、周辺貴族・国王のいずれも有力ジェントリ全体を掌握するに至らなかった。

15世紀半ごろになると中央において政治的主導権をめぐる党派抗争が起こり、一方で北部でも大貴族のネヴィル家とパーシー家の対立が表面化し、中央の党派抗争と絡んでいった。こうして北部の大貴族をも巻き込んだいわゆるばら戦争といわれる内戦が始まり、その結果新たにヨーク朝が樹立された。そしてこのばら戦争を契機に諸侯領の4分の1を保有していたジェントリのパー家が国王の側近として宮廷の要職を得る一方、国王からの諸侯領の譲与により諸侯領の4分の3近くを手に入れ、所領と官職や婚姻関係により地域社

会を掌握し中央と地方双方で活躍した。こうしてこのパー家を媒介にケンダルと中央（王権）とを結びつける政治ルートが生まれたのである。

このような15世紀後半におけるケンダルを取り巻く大きな変化は産業・経済分野でも見られた。まず14世紀後半以降ケンダルにおいて領主が保有する縮絨機の数は一躍的に増加し、この地域における毛織物生産が拡大していったことがうかがえる³。さらにヨーク朝下の1470年以降イングランドの毛織物の輸出は大きく増加し、ケンダルの毛織物もプリストルから時折スペインに、80年にはロンドンからも外国人商人により、15世紀末には荷馬でサウサンプトンまで運ばれた後イタリア商人たちなどによって輸出されていた⁴。16世紀には毛織物輸出の7割を占めたロンドンにおいては、半数以上を占める外国人商人が買い付けるために毛織物が集められたブラックウェル・ホールを基点にここに毛織物を持ってきた行商人が、ここで他の品物を買回しに持ち帰るといふ、毛織物による経済ネットワークが出来あがっていたと見られている⁵。ケンダルもこうしたネットワークの中に入っていたのではないかと考えられ、博士論文に向けケンダルの毛織物を通しての他地域との関係やこの地域のイングランドにおける位置づけの変化を検討するつもりである。

ケンダルと他の地域との関係やその経済面での変化を考察するためには、まず当時のケンダルの経済、産業状況の把握が必要である。しかしウェストモーランドの地域史研究はあまり盛んではなく、唯一の刊行史料である「ケンダル記録集⁶」以外にこの時代のケンダルに関しての一次史料としてどのようなものがあるのかも明らかではない。

ケンダル諸侯領の土地は全体としてあまり豊かではないが、中心の小都市ケンダルを含む比較的農地として良好な平地地帯と高地で湖を多く抱える山間部からなる。縮絨機が多数あったのは諸侯領の中でも山間部のウィングミア、グラスミア教区とみられている。「ケンダル記録集」にある14世紀後半から15世紀半ばにかけてのいくつかの領主の地代記録から、これらの地域の縮絨機の増加を確認できる。またこれらの史料は当時の経済状況の把握にも利用できるのではないかと考えられるが、中でも14世紀末の領主フィリップの時の地代記録（以後「フィリップの地代帳」と表記する）はもっとも細かい記述がなされている。

「ケンダル記録集」のフィリップの地代帳には誰がどのような大きさのどのような（牧草地などの）土地

を借り、いくら地代を払ったか、また縮絨機や放牧権、漁業権などを誰が借り、いくら払ったかが事細かに記されている。この史料から村の全員や複数の人物で縮絨機を借りていることが多いことや、地代や縮絨機の借り代よりも放牧権などの森林に関する権利等にはるかに高い金額が支払われていたことなどがわかる。しかし「ケンダル記録集」では出典が記されていないためその原史料が何であるのかが不明だった。私は昨年夏カンブリア州立公文書館ケンダル支部を訪問し、このフィリップの地代帳の原史料を探したが、短時間の滞在のため見つけることは出来なかった。

フィリップの地代帳の原史料を特定することは出来なかったが、昨年の訪問により中世のケンダルに関する一次史料は、当時のジェントリで現在も同地に居住するストリックランド家（Strickland）の保有する文書（一般非公開）と州立公文書館ケンダル支部を通して閲覧できるレバンス・ホール（Levens Hall）所蔵の文書のみであることを知ると共に、レバンス・ホールの文書の大まかな内容についてまとめた覚書を入手することが出来た。その後の調査でフィリップの地代帳がレバンス・ホールの文書を出典としているとの確信を得た。しかしレバンス・ホールの文書は公文書館のホームページにおいて史料検索を行えない為、どのような史料が含まれているのかということとはわからない。唯一前もって公文書館に依頼することで文書館員がホールより借り受け、公文書館内での閲覧、複写が可能であった。また他に州立公文書館カーライル本部にもウィングミアの荘園法廷記録の複写が現存することが判明した。そこでフィリップの地代帳の原史料の特定と収集やウィングミアの荘園法廷記録その他の史料の閲覧・調査・収集を目的に海外調査研究に赴いた。

2. 調査の成果

レバンス・ホールの中世文書はBox Aに収められ、152点現存している。その内1-53の番号が振られた文書はHistorical Manuscripts Commission⁷に、かつてのレバンス・ホールの所有者であるバゴットの文書（Bagot MSS）として載っている。53番までは19世紀に番号が振られ、それ以外については1983年これらが公開される際に番号が振られた。54番からの文書はケンダルに関する証書、Whinfell（ケンダル内の地名）に関する証書、セント・レオナルド・ホスピタル（ケンダル内のホスピタル）に関する証書、アップルビー（北部ウェストモーランド）礼拝堂の土地に関する証書の4つにグループ分けされている。これらは中世の文書

ということになっているが、実際にはエリザベス1世期のものもかなり含まれており、私が扱う中世後期のものはあまり多くはない。昨年文書館の職員などにも確認したところ、54-152番の文書のうち中世後期に関するものはすべて「ケンダル記録集」に引用されていたが、これらの中に調査を行なったフィリップの地代帳は含まれていなかった。

「ケンダル記録集」はケンダルの土地と官職に関する12世紀から18世紀の記録を、村ごとに年代順で収録した刊行史料である。そのためもとは同じ史料であったものが、村ごとにバラバラにされ収録されているケースが多々見られ、フィリップの地代帳もやはり村ごとに分かれている。これらの1つに「このレバンスの文書は16世紀初頭にオリジナルの文書に記載された場所や人物の名前を間違える下手な書記官により複写されたものだが、それでもここに載せる価値がある」という注が付いていた。このことから少なくともフィリップの地代帳についてはオリジナルの文書は見つからないが、誤りが多いと見られる複写がレバンス・ホールにあり、それが「ケンダル記録集」のもとなったものであろうことが推察される。

文書館のレバンス・ホール文書の担当者に昨年口頭とメールで、この「ケンダル記録集」に載っているフィリップの地代帳の原史料はレバンス・ホール文書ではないかということを探したが、カタログには見当たらないので、そうだとすれば消失した文書ではないかという答え以上のものを得られなかった。しかし昨年持ち帰ったレバンス・ホールの中世文書についての覚書から、先の152点のオリジナルの中世文書以外に、17世紀に複写された多くの中世文書の複写文書が残っていることが判明した。また「ケンダル記録集」はほとんど19世紀後半から20世紀初頭に生きた地域史研究者ファラーFarrerの手によってまとめられたものであるが、覚書により複写された文書も含むレバンス・ホールの中世に関する文書はファラーによって翻訳され、その翻訳の手稿がレバンス・ホールに残されていることが判明した。昨年の調査と「ケンダル記録集」の注からおそらくフィリップの地代帳の出典元はレバンス・ホールのBox Aのオリジナルの中世文書ではなく、中世の複写文書のほうにあるのではないかと推測した。そこで前もってカンブリア州立公文書館ケンダル支部を通して依頼を行ない、レバンス・ホール文書の中世の複写文書とファラーの翻訳を調査した。

ファラーの翻訳は製本された4巻からなる。文書館の中世レバンス・ホール文書の覚書によれば中世文書の複写文書は2つの記録簿、「Paper Register」と

「Parchment Register」にほぼ収められており、ファラーの翻訳の第1巻は主にPaper Registerの、第2巻はオリジナルの文書の、第3巻は会計記録や地代帳の、第4巻は主にParchment Registerの翻訳であった。まずこのファラーの翻訳からフィリップの地代帳を探したところ、第3巻にそれを発見した。ページの右上に1からページ番号が振られ14ページに渡るこの翻訳の冒頭には「Levens Mss Box 3/17」と記されていた。さらにこのフィリップの地代帳の翻訳の前には1375年の地代帳の翻訳を確認できた。こちらの冒頭には「Levens Mss Box 3/21」と記されていた。こちらは「ケンダル記録集」ではフィリップの地代帳よりも分量が少ないが、ファラーの翻訳は23ページに及んだ。ゆえに果たしてファラーの翻訳のすべてが「ケンダル記録集」に載っているのかどうかは疑わしい。

次にこれらの翻訳の元であろう複写文書の調査を行なった。これらの地代帳の複写文書が収められているはずのBox 3についてはレバンス・ホールの中世文書についての覚書に登場しない。Box 12/4のPaper Registerを確認したがこれらの地代帳はやはりその中には含まれていなかった。もう1つの複写文書の記録簿Parchment Registerは覚書によれば火事で大きなダメージを被り、Boxはずぶぬれになりバラバラになってしまったとのことであった。文書館の担当者にこのBox 3について尋ねたところこれはやはり火事でなくなってしまった史料であったということが判明した。

したがって今回の調査から「ケンダル記録集」に引用のフィリップの地代帳、並びに1375年の地代帳はレバンス・ホールにあった中世文書の複写文書を出典にしていること、これらの複写文書そのものについてはすでに失われてしまったことが判明した。したがってこれらの地代帳のオリジナルからもっとも近い史料はファラーの残した手稿の翻訳ということになる。ファラーが翻訳をした当時すでに史料のオリジナルがなかったとすると、どうしてこの複写は誤りが多いと判断したのか不明なところも残り、また複写自体もすでに失われておりファラーが翻訳をする際に犯したかもしれない誤りを知ることは出来ない。したがってこの史料（ファラーの翻訳手稿）の利用には慎重にならざるを得ないが、ファラーの手稿は「ケンダル記録集」で引用される際の誤りや、当時の村落での産業状況等の全体像を把握するのに有効な史料となるであろう。また今回このファラーの地代帳に関する翻訳部分と共に、ファラーの翻訳後新たに見つかった中世文書の複写文書Box 18M/10をデジタルカメラで複写した。このBox 18M/10はレバンス・ホール文書からの引用は

ファラーの翻訳に頼っている「ケンダル記録集」からは漏れている。Box 18M/10の史料もボロボロで、あちこち燃えた跡があり消失した部分も少なくなかった。この史料の内容についてはまだ検討できていないが、見たところおそらく複数の種類の史料が含まれていると見られる。これらが私が取り扱う時代に関するものかどうかはわからないが、そうであれば「ケンダル記録集」にない史料として大変有用な史料となるだろう。

またカーライル本部において中世後期にカンパーランド、ウェストモアランド州の有カジェントリであったラウザー (Lowther) 家の家系文書 (D/LONS) の荘園に関する文書群のなかに残されていたウィンダミア周辺域の荘園法廷の記録を調査した。カタログによればこれは Anthony Garnet と裏書されている16世紀に複写されたウィンダミア荘園法廷の記録である (D LONS/L5/2/11/291)。先行研究ではこれは15世紀の荘園法廷記録の複写とされ、森林に関してなどの荘園住民たちへのさまざまな規則 (byelaw) などを見ることが出来るということである。

この史料はかなりボロボロで破れているところに後ろから紙があててあった。そのあて紙に文字が書かれていたため、最初私はあて紙ではなく史料の一部かと勘違いした。しかし文書館員によれば文字が書かれて使われていた紙を適当にあて紙に使ったようだというので、文書館員も驚いており、カタログにその旨が新たに書き込まれていた。こちらの史料についてもデジタルカメラで複写した。この史料については当時の荘園法廷の記録として、荘園内の規則、森林などの共有地のあり方についての史料として用いられているが⁶、地代帳と共に考察することで当時のケンダルの村落の産業状況、ジェントリより下位の社会層の人々の状況を把握するのに有効な史料となるであろう。

このほかイギリス国立公文書館ではパー家に関わる人々の史料や遺言状などの調査を、大英図書館とアーミット図書館では中世後期のケンダルや毛織物に関係する二次文献を収集した。

3. 今後の研究計画

今後博士論文の一部としてケンダルと他の地域の関係やイングランドにおけるケンダルの位置づけの変化について経済的側面からの考察を深めていく予定である。そのために具体的に1つは毛織物をファクターとし、地域ジェントリ (特にパー家) の人脈などを手がかりに毛織物と地域のジェントリとの関わりや、毛織

物の国内、国際での流通、取引などを通して政治、経済など複合的にケンダルが他の地域とどのように関わっていたのか、イングランドにおける位置づけはどうであったのかを考察する。

もう1つ毛織物がケンダルのジェントリより下位の社会層、ケンダル地域社会にどのような影響を及ぼすものであったのかを考察する。この研究の上で今回収集した領主の地代帳や荘園法廷記録は当時のケンダルで毛織物という産業の位置づけが変化したのか、地域の人々の生活に毛織物はどう関わっていたのかという産業状況について整理する際に中心として用いる予定である。今回の史料の考察を試み、この中世後期ケンダルの産業の変化については次号『人間文化創成科学論叢』への投稿を予定している。

今回の調査では日本には収集できない資料の収集や調査などを行い、これらは今後研究を進めていく上で非常に有用なものになると思われる。

注

- 1 近年の15世紀イングランドの国制についての見解は以下を参照。Carpenter, C., The Wars of the Roses: Politics and the Constitution in England, c. 1437-1509, Cambridge, 1997; Harriss, G. L., Shaping the Nation, Oxford, 2005.
- 2 貴族より下位の騎士、準騎士階層の人々。
- 3 Records Relating to the Barony of Kendale, Curwen, J. F. (ed.), Cumberland and Westmorland Antiquarian and Archaeological Society, 1923 (rep.1998-99), vol.2, pp.3, 7-8, 10, 22, 24, 32-33, 43-44, 47, 60, 65-70, 72-73, 91, 94-97; Armitt, M. L., "Ambleside Town and Chapel", Transactions of the Cumberland and Westmorland Antiquarian and Archeological Society, new series (CW2), 6 (1906).
- 4 Jones, M. A., "Westmorland Pack-Horse men in Southampton", CW2, 59 (1959), p.65.; Carus-Wilson, E., "The Overseas Trade of Bristol", in Postan, M. and Power, E., (eds.), Studies in English Trade in the Fifteenth Century, London, 1933, pp.183-188; Cobb, H. S., The Overseas Trade of London Exchequer Customs Accounts 1480-1, London, 1990.
- 5 Barron, C. M., London in the Later Middle Ages — Government and People 1200-1500, Oxford, 2004.
- 6 Records Relating to the Barony of Kendale, Curwen, J. F. (ed.), Cumberland and Westmorland Antiquarian and Archaeological Society, 1923 (rep.1998-99), 2 vols.
- 7 Historical Manuscripts Commission 10th report, 1885, pp.318-347.
- 8 Winchester, A. J. L., Landscape and Society in Medieval Cambria, Edinburgh, 1897, pp.100-115.

【指導教員のコメント】

現在博士論文執筆中の加藤はるかさんが行っている研究は、中世後期から近世にかけての変革期に、イングランドの一地方が、地域を超えたネットワークに結びつけられていく過程を、政治や経済の両面から析出していこうというものです。日本の同じような変革期と比較しつつ、政治国家体制の変化を地域の視点から見つめ直すにはどうしても、その地域へ出かけていき、その地域に残されたオリジナル史料を調査する必要があります。今回の海外調査研究によって、加藤さんは、短期間にたいへん効率的で詳細な史料調査を行ったわけですが、地域とそれを超える毛織物交易関係について、今回得られた史料から何がわかってくるのか、それにパー家という特異なジェントリ家系がどのようにかかわっていったのかを具体的に検討することが必要となってくるものと思われる。ローカルで具体的な史料から、どのようにして全体という構造を構築していくのか、今後が楽しみです。

(お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 准教授 新井 由紀夫)